

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17404020

研究課題名（和文）東アジアにおける黒潮流域の歴史的空間に関する比較研究

研究課題名（英文）A COMPARATIVE STUDY ON HISTORIC SPACES ALONG THE BLACK SEA CURRENT IN EAST ASIA

研究代表者

益田 兼房（MASUDA KANEFUSA）

立命館大学・立命館グローバルイノベーション研究機構・教授

研究者番号：50313317

研究成果の概要（和文）：

フィリピンから台湾を経て北上し、琉球列島から日本列島南岸を経て小笠原諸島や、さらに北へ韓国済州島等に至る広大な黒潮流域文化圏の島々では、海からの強風に備えての家屋や集落を囲む石垣の発達や小規模な分棟型民家の密集する集落形態が共通する。特に琉球列島最南端に位置する竹富島・波照間島では、古代以来の貝塚や中世以降の集落遺跡が多数残り、現存する伝統的集落などに継承された歴史が読み取れ、文化的景観として世界遺産候補の価値がある。

研究成果の概要（英文）：

The concentrated layout villages consisted of separated small building dwelling, with stone hedge walls to protect strong winds are common in the islands along the Black Sea Current, which streams from Philippine to Taiwan, then up to north Ryukyu Islands to south side coasts of Japan Islands until Ogasawara Islands, and also to Cheju Island in Korea. Especially both the Taketomi and Hateruma islands, located in the most south of Ryukyu Islands, have high value to be a candidate as a cultural landscape of World Heritage, with their existing historic villages, many archaeological dwelling sites of medieval periods, and shell mound sites of older times.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2005年度 | 4,200,000  | 0         | 4,200,000  |
| 2006年度 | 3,300,000  | 0         | 3,300,000  |
| 2007年度 | 3,300,000  | 990,000   | 4,290,000  |
| 2008年度 | 2,500,000  | 750,000   | 3,250,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 13,300,000 | 1,740,000 | 15,040,000 |

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：工学・建築史・意匠

キーワード：東アジア、黒潮流域、建築学、民俗学、集落、文化的景観、竹富島、波照間島

## 1. 研究開始当初の背景

東アジアの歴史的な民家建築や集落の研究を進める上で、国境を越えて類似の類型がど

う分布しているか、その分布圏を成立させる必然的な自然的・人文的理由は何か、という、各国各地域が平等の立場で参加できる実証的

な調査研究アプローチが、日本から発信されるべき時期になっている。

日本国内では、戦後の経済成長期の農山村の急激な変化に応じて、民家の調査研究は昭和30年代から60年代で終了し、その結果、全国的な類型分布とその17世紀から20世紀に至る変化の様相が解明され、各地の代表的な遺構約五百棟が重要文化財として保存されている。集落町並みの調査は昭和40年代から始まり世代を超えて現在も進行中であるが、現時点では北海道から沖縄に至る全国で86地区に及ぶ伝統的建造物群保存地区が保存され、そこでは一万余棟の伝統的民家が保存されている。

一方、同じく経済成長著しい東アジア地域では、調査研究と保存措置が不十分なままに、農山漁村の大きな変化期を迎えている。近年の韓国での伝統的建造物群保存地区制度の廃止が、民家保存を推進する原動力が建築学でなく民俗学にある実態を踏まえられない制度設計ミスがあるように、各国での実情に即した実証的で総合的な調査研究と保存措置の検討が必要となっている。中国の建築史研究の進展は近年めざましいが、東アジア文明のなかでの建築文化の歴史を中国の立場からの包括的な視点でこの地域全体を捉える方向が、いずれ出てくるものと考えられる。日本には、意見や方法を押しつけるのではなく、広域での建築文化の伝播や独自形成の現象を国際的な調査研究の対象として提示し、関係諸国の研究者の参加を得た共同作業を通じて、それぞれの地域でのナショナリズムを越えた自主的な発展と交流を支援するような企画を開始することが、いま期待されていると考えた。

## 2. 研究の目的

東アジア海域を北上する黒潮が、フィリピンから台湾を経て、東寄りへは日本の沖縄南西諸島や太平洋側沿岸域、あるいは北寄りに韓国済州島へと達しており、そこに類似の集落構成分布が見られることは広く知られている。日本国内では、沖縄の竹富島、渡名喜島、伊豆八丈島で、類似の石垣で囲まれた密集した集落形態が、伝建保存対策調査で判明している。民家調査の結果では、分棟型形式が、沖縄最南端から千葉県沿岸地域に至る黒潮流域に広く分布することが知られている。フィリピン政府はルソン島北部のバタン島の集落を来年世界遺産に登録申請するが、将来的にはこれらの島々の集落は、多くの国境をまたいだ一つの世界遺産として国際的に評価される可能性も高い。

この研究では、これらの関連地域の文化遺産を比較検討し、当面の課題となる日本国内の世界遺産候補たり得る地域に着目して、その特徴や価値を明らかにしようと試みた。

## 3. 研究の方法

現在の世界遺産の評価においては、歴史的な集落や建造物群だけでなく、それを生み出した気候風土、植生や農林漁業、信仰形態など多岐にわたる分野の総合的な指標として、文化的景観なる概念が用いられることが多い。本研究においても、これらの諸分野をカバーするべく、関係各地域の関係専門分野の研究者に研究協力者としてご参加いただき、黒潮流域の島の集落の民家建築・集落・祭祀の歴史的空間を、既存研究蓄積を活かして分野別の調査研究を行い、その有形無形の文化遺産としての総合的な価値評価を行った。

具体的には、2005年度は日本の竹富島と八丈島、2006年度はこれに加えて韓国済州島と慶州、2007年度は韓国済州島台湾蘭嶼島フィリピンバタネス諸島での、それぞれ現地調査を現地の研究者の参加を得て行った。特に、沖縄県竹富町の竹富島波照間島については、現地調査を丁寧に行って、世界遺産候補推薦に必要な情報や資料の収集を行い、行政への協力連携を行った。2008年度は、まとめとして建築学民俗学等各分野の研究者の参加を得て、早稲田大学にて総合シンポジウムを開催した。

## 4. 研究成果

(1) 研究の具体的な成果としては、沖縄県竹富町の世界遺産暫定目録一覧表追加提案書「黒潮に育まれた亜熱帯海域の小島竹富島波照間島の文化的景観」に反映されているので、ここでは以下にその概要を示す。

### (2) 竹富島波照間島の歴史・文化の概要

フィリピンから台湾を経て北上し、琉球列島から日本列島南岸を経て小笠原諸島や、さらに北へ韓国済州島等に至る広大な黒潮流域文化圏の島々では、海からの強風に備えての家屋や集落を囲む石垣の発達や小規模な分棟型民家の密集する集落形態が共通する。

ここ琉球列島の最南端に位置する竹富島・波照間島では、古代以来の貝塚や中世以降の集落遺跡が多数残り、数千年にわたる文化的伝統の継承的な発展を、現存する伝統的集落などの豊かな文化的資産に見ることができる。両島では、珊瑚石灰岩の石垣と防風林で囲われた木造平屋の屋敷が、隆起珊瑚礁の小島の中央部に密集して伝統的集落を構成し、過酷な台風や地震津波などの自然災害から生活を防御し、亜熱帯の気候風土に適合した黒潮流域特有の集落景観を形成している。ともに集落は、周辺の農用地や海岸沿いの防風林や周辺珊瑚礁等の自然環境と一体の景観をなし、竹富島は遠浅な石西礁湖のなかであって周囲に大きく珊瑚礁が広がり魚垣が発達するのに対し、外洋の厳しい環境にある日本最南端の有人島である波照間島で

は農業が盛んである。いずれも亜熱帯海域の黒潮流域での小島における、太古以来の自然環境と人類のふれあいを典型的に示す文化的景観を構成する。

この両島は、下記のように多くの文化財保護の措置が存在してその保存状態に優れ、かつ無形と有形の文化遺産の相互連関に着目した総合的視点からの研究が蓄積する。両島では、自然崇拜や祖先崇拜を中心とするアニミズムの信仰の場である御嶽や井戸等の聖地が、地域共同体の多くの年中行事などの信仰祭礼行事とともに現存しており、家屋・屋敷・集落・島の山林や海岸など、島全体が総合的な信仰体系の宇宙を構成している。両島の有形の文化資産は、このような無形の文化遺産の行われる文化空間として機能しており、豊かな自然環境とともに、有形と無形の生きた文化的伝統を示す文化的景観となっている。

#### A 伝統的集落景観及び文化的景観

集落はともに、白い海砂を敷いた道に面して、石垣と常緑の屋敷林に囲まれた屋敷が並び、軒の深い急勾配の赤瓦屋根の木造民家が立つ。竹富島集落は重要伝統的建造物群保存地区として 20 年を数え、波照間島集落でも同様の保存措置のための調査が始まっている。両島と周囲の珊瑚礁を含む全域は、今後文化的景観として指定され一体的に保護される。

#### B 遺跡群及び御嶽

竹富島では、村建ての伝承に結ばれる御嶽とともに、集落移動を重ねながら現在に到った集落変遷史をたどれる複数の中世集落遺跡が調査され、波照間島でも、先史時代の貝塚や複数の集落遺跡が調査されている。琉球王国の支配下におかれた時期の火番盛や蔵元跡、それ以前にルーツを持つ国指定史跡下田原城跡等、数千年の多様な遺跡に恵まれている。

#### C 民俗文化財・民俗技術

亜熱帯海洋性気候の自然環境の中で育まれた島の衣食住や人生儀礼にかかる約束事、農耕・漁労等の生業や染織に代表される工芸の技、自然崇拜と祖先崇拜があいまじり、海の彼方への憧憬を映すニライカナイやミロクへの信仰、神との交流の舞台である御嶽と祭祀・芸能など、有形無形の民俗文化財や民俗技術が豊かに伝承されている。重要無形民俗文化財種子取祭はその保存継承の象徴であり、伝承活動のコアに「喜宝院蒐集館」がある。

(3)竹富島波照間島の世界遺産登録の価値は、以下のように文化遺産の価値基準に該当し、また、その真実性の証明・類似遺産との比較は以下ようになる。

) 琉球列島の最南端に位置するこの竹富

島と波照間島は、16 世紀以降は琉球王国の支配下に属したが、両島に現存する数千年前の貝塚遺跡や中世以降の集落遺跡群は、現存する伝統的集落とともに優れた文化的景観を構成し、これらが琉球王国より古い黒潮流域文化圏の文化的伝統の存在を立証しており、顕著で普遍的な価値をもつ。

) 東アジア周縁部の黒潮流域文化圏の島々では、海からの強風に備えての家屋や集落を囲む石垣の発達や小規模な分棟型民家の密集する集落形態が共通する。竹富島・波照間島はその文化圏の中央部にあり、ともに珊瑚石灰岩の石垣と防風林で囲われた木造平屋の屋敷が島の中央部に密集して伝統的集落を構成し、亜熱帯の気候風土に適合した黒潮流域特有の集落景観を形成している。集落周辺の農用地や海岸沿いの防風林や周辺珊瑚礁等の土地利用は、亜熱帯海域の黒潮流域での小島における、太古以来の自然環境と人類のふれあいを典型的に示す文化的景観であり、集落景観とともに顕著で普遍的な価値をもつ。

) 両島は、大陸から離れた黒潮流域文化圏に位置する小島として、海の彼方への憧憬や神との交流などのアニミズムの信仰祭礼行事、生産生業に関わる有形無形の民俗文化財が豊富で、数千年にわたる土着の文化的伝統が地域社会のなかで今に生きて継承されており、これら無形の価値と密接に関連する文化的景観として、顕著で普遍的な価値をもつ。

#### ・真実性の証明

両島の有形無形の文化資産については多方面の研究があり、その真実性は学術的に立証されている。波照間島は、戦後オランダの文化人類学者アウエハントが長期の現地研究調査を行って報告書が刊行され、竹富島の重要無形民俗文化財種子取祭などの伝統行事とアニミズム信仰に関わる御嶽空間は近年科学研究費研究報告書がある。史跡下田原城跡や竹富島重要伝統的建造物群保存地区、竹富島の博物館施設喜宝院蒐集館の有形民俗文化財、両島の中世集落遺跡等の個別の文化財は、学術調査や報告書刊行が蓄積する。有形無形の文化遺産の総合的な関係がよく読み取れる場所として竹富島は国際的な注目を浴びており、2004 年のユネスコとイコモスが参加した国際会議で「無形および有形の文化遺産に関する沖縄宣言」が採択され、イコモス世界遺産アドヴァイザーのコッカ・ヨキレット博士も 2005 年竹富島を訪問し高い評価をしている。このように、竹富島・波照間島の文化的景観の真実性と独自の価値については、専門家による国際的な高い評価を得ている。

#### ・類似遺産との比較

このような、独自の価値を有する類似遺産

は、世界遺産リストには存在しない。あえて、東アジアの伝統的な木造建築の集落を含む世界遺産を列挙すれば、中国の麗江、フィリピンのピガン歴史地区、日本の白川郷五箇山の合掌集落があるが、いずれも広域な文化的圏域や無形の文化的伝統との関連性が明示された文化的景観としては評価されていない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

益田 兼房 (MASUDA KANEFUSA)

立命館大学・立命館グローバルイノベーション

研究機構・教授

研究者番号: 50313317

##### (2) 研究分担者

神野 善治 (KAMINO YOSHIHARU)

武蔵野美術大学・教授

研究者番号: 70298024

板谷 直子 (ITAYA NAOKO)

立命館大学・立命館グローバルイノベーション

研究機構・研究員

研究者番号: 90399064

李 明善 (YI MYONGSON)

立命館大学・立命館グローバルイノベーション

研究機構・研究員

研究者番号: 20434714